

A Round-Table with Prof. R. Tamai

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18323

玉井龍象先生を囲んでの研究会



経済学と人生

玉井龍象
海野八尋
佐々木雅幸

年明け早々、退官前で何かとお忙しい玉井先生を煩わせて、先生の「経済学観」を伺いました。あわせて先生の学生時代についても話していただきました。座談の相手は（司会となっている）同じ大講座（経済政策）に所属した海野八尋教授、佐々木雅幸教授です。

司会 それでは始めたいと思います。

今日はお忙しいところ大変ありがとうございます。先生に来ていただいてから11年経ってしまいました。その11年の間に書いた物はたくさん読ませて頂いてはいたのですが、先生の考え、経済学観とか、あるいは経済や社会に対してどういうお考えを持っているか、プライベートに議論することがなかったのでこれを機会に伺いたいと思います。いただいた資料を見てあらためて思ったのですが、学生時代から先生の翻訳とか書いた物、「現代資本主義理論」とかアーロノビッチやドップの翻訳、などにも相当ご厄介になったというのが分かりました。たまたま同じ職場になって

いながら、僕の問題関心と先生の関心がかなり重なっていることが前から分かってはいたのですが、突っ込んだ議論ができなかったのです。そんな事も含めてお話を伺いたいと思います。構成としては三部作ぐらいと思っています。一番最初に研究者になる前の話しを若干お伺いして、それから桃山に行くまでの間の数年間、それから後、学者になられてからの桃山時代と神奈川と金沢の時期。そういう時間を追ったものとそれとオーバーラップしてやる仕事の中味、その辺を3番目に伺います。もちろん3番目のものを中心にしながらお話を伺っていきたいと思います。先生の御先祖が加賀藩の重臣だったことと、本籍が東京にあるのはわかっているのですが、出身校は旧制長野中学、まずそのへんからお願いします。

1. 学生時代と会社勤め

玉井 僕の父は、鐘ヶ淵紡績（鐘紡）という会社に勤めていて、転勤をしまして、昔は

単身赴任などないので社宅に家族で住んでいました。僕が生まれたのは東京の向島区の鯉ヶ淵という所で、今は墨田区です。もともと鯉ヶ淵は鯉紡の発祥の地で、そこで生まれたわけです。小学校4年までいて、昭和13年です。その春に長野工場が新しく出来て、その工場に転勤になったので家族が一緒に行き、小学校から、旧制の長野中学へ入ったわけです。中学入学の時が昭和16年、12月8日に真珠湾攻撃でしょう。まったく文字通り戦時体制の最中です。東京に比べて長野はやや田舎ですが直接の空襲もなく、軍国的なものはもちろんあるけれども若干ずれがある。学校教育そのものは、小学校の頃はまだ戦前の平和な自由な空気が残っており、長野師範の附属小学校に通っていました。長野県というのは非常な教育県だし、松本は旧制の松高はあるし、思想運動も盛んですが大政治家とか大実業家は出ないけど、思想家とか詩人が輩出しており議論好きという雰囲気は確かにありました。しかし、松本と諏訪と長野はまた雰囲気違います。長野の方はどちらかというと善光寺の門前町でのんびりしているが、ところが諏訪、松本は思想的にももう少しシャープです。それからまた、東の方の上田とか佐久あの辺も独特のものがあるらしいけど、いろいろ歴史があってもおもしろい。長野中学は旧制ですから5年です。4年の夏に海軍の学校を受けた。僕は目が悪いから兵学校でなくて主計科士官のための経理学校。あのころは文科系は旧制高校もほとんど採用しないし、理科系はすこしは兵役を猶予されたのが、そ

れも昭和19年、20年はそれもなく18年からは学徒出陣ですからね。それで海軍経理学校に入って、やがて8月15日に終戦でしばらくして復員してきたわけです。

司会 経理学校の場所はどこですか。

玉井 海軍経理学校はもともとは築地にあって、昭和19年の秋からは築地の方は予備学生、短期の将校を養成していました。我々は今の神戸の垂水に疎開をした。神戸商大があった場所です。そこで8月15日を迎えました。もともと海経は、兵科の学科以外に、旧制高校と大学の法科や経済学部で教える科目も同時に文官講師が講義をしていました。例えば東大法学部からは民法は我妻栄、憲法は宮沢俊義又商大からは経済原論の中山伊知郎、労働法の吾妻光俊などが講義していましたし、昔は芥川龍之介も英語を教えていました(但し、横須賀の海軍機関学校)。もちろん一般教養のドイツ語や微積分の数学の授業もありました。終戦前日まで午前中はこれらの授業が行われ、その点は恵まれていました。父は戦争中、紡績工場の建設で南方のセレベスにいてまして、しばらく消息不通。家族は男は僕1人で、妹が4人いて年寄りもおり、養わなくてはならないので勤めたわけです。経理学校から復員してきてから2年半サラリーマン生活をし、父が22年に帰ってきたので、もう一度勉強をし直そうかということで大学に入り直したわけです。

司会 一橋を選んだというのは？

玉井 特にないですね。サラリーマンだったので受験勉強をする時間が全然ありませんで

したが、海経時代に戦時でしたが英語・数学・法律・経済学の初歩を習っていましたし、とにかく、両親も私も生まれた東京の学校に行こうと思っていたわけです。そこで家庭の事情から、取りあえず3年間で卒業できる東京商大の専門部に入ったのです。昭和23年に当時は、終戦後の激動がまだつづいており、またインフレのため授業料も倍増されました。そのため授業料値上げ闘争、さらにはレッドパーjury反対闘争、京大の天皇行幸反対事件。東大、早稲田は全学連の拠点でしたが、一橋は場所も都市から離れていて、主流から外れていました。それでもそれなりの刺激・影響はありました。

司会 玉井先生のスタイルを見ていると観察をするとか様子を見ているという印象がするんですが、このときはどっぷり漬かっていたのですか。

玉井 一橋の中ではアクティブな自治会の執行委員長でなくて僕は評議員会議長でした。それから一橋新聞の編集をしてましたから、少し距離を置いて客観化するという姿勢でしたね。

司会 この時の教授陣というのはすごいですね。

玉井 その頃は、戦後日本の社会科学の啓蒙期ですね。一橋にはいわゆるオーソドックスのマルクス経済学はいないわけです。大塚金之助は戦争中岩波の「日本資本主義発達史講座」の執筆陣の一員として逮捕されたりしたけれども、他に本格的なマルクス主義はいませんでした。むしろ近代経済学や経済史の教

授が活躍していました。経済史はどちらかというと大塚史学批判とかウエバー批判ですね。上原専緑、増田四郎等は実証主義史学でしかも中世が専門でした。それから思想史や学史は当時は輸入段階でした。

司会 東大というか帝大系がドイツ経済学でしたから、やはりその辺は元気ないですね、時期的に。

玉井 東大経済学部は戦争中もめましたからね。逮捕されたり追放された教授のあとには神がかり的な右翼教授が残っていただけですから、東大経済学部へ中山伊知郎や僕のゼミの指導教授である杉本栄一等が非常勤講師で経済学の講義をしていました。農学部には東畑精一がいて、彼と中山伊知郎がシュンペーターを講義していた。宇野弘蔵は戦争中は東北大から三菱経済研究所におられて、戦後、東大社研に戻ってきた。一橋はマルクス経済学者がいないので、僕の卒業後高須賀君なんかが中心になって宇野さん呼んだりしました。その後杉本ゼミの種瀬さんが（彼は死にましたけれども）マルクス系の原理論を講義するようになったわけです。また、僕の一橋同期の渡辺寛君も宇野派の弟子として、法政の助手から東北大の教授になりました。杉本さんは昭和23年当時オスカー・ランゲの説をもとに近代経済学とマルクス経済学の総合と題する論文を「理論」という雑誌に発表し、これが非常に評判になって安井琢磨、大河内一男、風早八十二などが杉本栄一と論争してました。杉本栄一さんはもともとマーシャルの研究をしていたのですが、戦前からご自分でマルク

ス関係のことに興味を持ち勉強していました。ところが彼は僕が卒業する昭和27年の9月に、今でいう狭心症で急逝しました。51歳でした。岩波全書の「近代経済学史」はまだ草稿のままでしたので、これを真実一男、伊東光晴氏らが整理して、その後公刊されたわけです。僕も最終学年だし、指導教官がいなくなりいろいろと迷っていましたが、結局就職しました。ちょうど朝鮮戦争特需後の非常な就職難の時代で、就職できなかった学生が多数留年し、その後新制第一期の大学院に行った者もいます。

司会 やはり僕などが先生の書いた物を読んでみますと、いかにも一橋ないしは杉本ゼミ出身という印象を受けるのですが、やはりその時代と一橋という環境、先生と学生との関係から先生は非常に大きな影響を受けたということですか。

玉井 自分ではあまり狭い殻に閉じ籠もらないよう心がけていたけども、やはり環境の中に生きるからそれはあります。経済学の本格的な勉強は学生時代も国立（後期専門課程）に移ってからで、終戦直後から一橋入学当時は哲学書や西洋の文学、小説類を乱読していました。

司会 やはり時代のせいですね。

玉井 ようするに学生の発散する精神的なもの、小説を読むとか、映画を見るときにあられていました。トルストイの『戦争と平和』とか、伊藤整訳「チャタレイ夫人の恋人」などは寮の隣室にいた深沢宏君（故一橋教授）から借りて徹夜で読みました。

司会 最後まで寮におられたんですか。

玉井 後半2年ぐらいは下宿です。荻窪にしばらくいました。

司会 ゼミは日曜日にやったということですが。

玉井 日曜日の朝9時から昼飯を挟んで、しかも学校でなくて先生の私宅でやるのです。ゼミそのものもさることながら、むしろそのための準備の負担が大きかった。あらかじめゼミのレポートの前にレジュメを書いて、一週間前に先生に提出して、チェックを受けてからOKと言われたら報告をする。学年によっては『資本論』の一部を読んだり、ローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』を読んだりケインズの『一般理論』を原書読んだりしてマル経と近経の両方をやりました。（当然、翻訳は出ていないのでは？）翻訳は塩野谷訳が出てました。解説書は小泉明氏のものディラードの『I.M. ケインズの経済学』が東洋経済から出てたくらいです。クラインの『ケインズ革命』の訳はまだ出ていませんでした。上級生や、特研生の伊東光晴さんや浅野栄一さんも出席して学生にいろいろと突込んだ質問をするわけです。同じ頃ゼミには、宮川公男君（一橋大教授）や、近藤哲雄氏（元経企庁官・労相）がいます。先輩の宮崎義一・宮崎犀一氏らも時々出席していました。

司会 その上下関係というのやはり意味があるのですか。雰囲気からいくと大学院ぐらいの感じですか。

玉井 今から考えるともちろん、最近の修士課程よりはレベルは上です。学生数も少なかっ

たけれども。

司会 伊東さんが言っていたのですが授業そのものも、並行講義だったそうですね？

玉井 中山さんと杉本さんが「理論経済学」と「経済原論」を交互にやりました。

司会 授業に行くとサミュエルソンを支持する立場で中山さんがやると、わざわざ反抗してそれを批判する講義を今度は杉本さんがやる、両方出て面白くてしょうがなかったと伊東さんが言ってましたけども、そういうふうな雰囲気があったわけですね。

玉井 そうです。

司会 全部の先生がそうだったわけではないでしょうが、学生としては嬉しい講義ですね。

玉井 だいたい競争講義が多かったと思います。山田雄三氏は当時「計画経済論」を研究していましたが講義科目は「経済学史」でした。高島善哉氏は「社会思想史」、上田辰之助さんは「経済思想史」、大塚金之助も「社会思想史」だった。西洋経済史では上原専緑、松村恒一郎、増田四郎氏等が、又経営学では古川栄一、山城章、藻利重隆等、金融論では山口茂、高橋泰蔵、小泉明氏等が並行して講義していました。僕等もあまり設置基準に拘束されなくていいなと思っていた。特に一橋大学はいわゆる旧制高校が合体して新制大学になったわけではないから、旧制のままのカリキュラムなり学風が自由に残っていた。旧商大の学部と専門部および予科とが一緒になったわけで、そのほかに新制高校と旧制高校の両方からも新しく学生が入学してきて新制大学が発足したわけです。金沢大学の場合は旧

制高校の社会科学と経済学のないところに作ったので、設置基準にしばられてしまうという問題がある。旧帝大では講座制の枠があるから、非常にきついわけです。競争講義のしようがない。教官連中もそういう点ではきちっとしているわけでしょう。しかし一橋の場合はその点はルーズでした。

司会 いまの金沢大学経済学部の大講座に近いですか。

玉井 大講座の枠もなく、学生は所定の単位数さえ充たせばどんな科目を履修しようとまったく勝手でした。。だから文部省からみると扱いにくい。学長選挙にも学生の拒否権というのがありました。

司会 あれは先生の頃作った制度ですね。

玉井 そうそう。4、5年前の学長選挙のときに誰か学生の拒否権で学長候補者から除外されてしまった。瓢箪から駒ですよ（笑）。そういう問題で文部省からしょっちゅう文句を言われている。戦前は東大に吸収されそうになったのを反対して籠城事件を起したりして、文部省は手をやいていたようです。僕がいた頃も東大に対する対抗意識が強かった、少くとも学問的には。当時旧制高等学生が参加する朝日新聞主催の学生討論会があって、「天皇制について」など討論し、あとで講評がありました。ある年には商大専門部が第1位で、2位が商大予科か旧制一高でした。それと学風としては文献学的な色彩が強いですね。独自のオリジナルな理論の創造という面では果してどうでしょうか。実証分析とか文献考証とか、そういう伝統は今から考えるとありま

す。

司会 逆に言うと理論と現実の狭間のところで、なんとか考えていこうという志向性があるようにみえますが。

玉井 僕は特定の教義や学説にあまりこだわるとか、文献学的なやり方というのは最近限界があると思っている。経済学をみっていると、ドイツの場合や、戦前のアメリカのように学問的な先進国はどうしてもそうなりがちです。イギリス系の特にケンブリッジ系の人はまったくそういう意識がないから、あまり外国人の本を読まないですね。

司会 アメリカの学者が他国の学者の論文を読まないのとは意味が違いますね。

玉井 戦前はマルクス以外はドイツ歴史学派でしょう、日本の社会科学は、19世紀前半から後半にかけてのドイツの学問を一所懸命輸入した。経済政策論もドイツ歴史学派の政策論をそのまま輸入してきて講義していたわけで、我々の学生時代にも残ってたわけです。

学生新聞の編集にたづさわり学内の記事の取材だけではなくて、学外の執筆者に書評を頼んだり、文化欄、学芸欄を担当するわけです。当時何がトピックスで話題になっているかを掴んで総合雑誌の亜流みたいなものだけど、執筆者に頼みにいくわけです。僕は主にそっちの方を2年間位やっていたので、当時の名の売れた評論家とか、学者とかに原稿を頼みに行ったのです。当時一番多いのは羽仁五郎だとか、古在由重とか平野義太郎、それに本学の平館先生の父君の平館利雄氏や小泉信三という人達が多かったですね。日本資本

主義をめぐる神山・志賀論争とか明治維新の評価をめぐるの井上清・遠山茂樹の論争、封建制から資本主義への移行をめぐる Dopp・スウィージ、高橋幸八郎、ロドリー・ヒル等の論争などを紹介したり、関係者に小論文を依頼しました。まだスターリン批判、六全協の前でしたが日本共産党では国際派と主流派に分かれて、全学連も分裂した。(一橋の中にも持ち込まれてきたんでしょ…) そう持ち込まれてきた。直接ではないですけど。(じゃあ、同期の方でそのまま山村工作隊にいつしまった人も…) 多い多い。山村工作隊で捕まった友人も何人かいます。それは僕が卒業する頃で昭和27年頃です。メーデー事件は僕の卒業した後です。このころ一緒に学生新聞をやっていた仲間に、先輩では伊東光晴、山口敏明(東ソウ会長、経済同友会環境問題委員長)、平野勝(サッポロビール専務・故人)、同じ学部には加藤秀俊(文部省大学教育開放センター長)、辰濃和男(元朝日新聞論説委員)、下級生には山田欣吾(一橋大教授)君らがいます。

司会 そういう状況から卒業されていく時に、勉強ではなく、なぜ就職の途をとったのです。家の事情がおありだったのですか。

玉井 勉強するつもりでいたんですが、先生も急死されたし、経済的な理由もあってとにかく一旦就職して、その中で勉強しようと考えました。就職した千代田化工建設(株)という会社は当時はまだ創業間もない石油化学の三菱系プラントメーカーでした。いまイランとか中東に進出しています。技術屋さんには、おもしろい会社です。そこに1年半位いて(こ

の時仕事は…経理とか…) いや、業務課という企画担当ですね。石油以外の新しい化学プラントのための洋書を読んで要約したり、技術家の常務取締役の秘書のような仕事をしていました。そこを途中で辞めて平凡社という戦前から百科事典などを専門とする出版社が新しい大百科事典を出すことになり、そのための要員を新しく募集することになり新聞広告を見て、自分の専門の勉強ができるだろうと考えて応募しました。平凡社では百科事典の関係だけで50人位編集部員がいるわけです。文学から婦人家庭問題、それに自然科学系まで全部あるわけで、経済、産業の担当者として入社したわけです。(誰かの口効きで…) 伊東光晴、佐藤金三郎氏と同期で今、新評論の会長をしている二瓶氏が平凡社にいました。200人位募集者がいて、約30人が採用されました。編集長は、岩波の雑誌『思想』の編集長で、三木清や羽仁五郎と親しかった評論家の林達夫でした。僕と一緒に百科事典の編集をやっていてその後大学の先生になり、有名になったいろいろな面白い連中がたくさんいます。

司会 平凡社の編集をやっておられて、研究職に代わった人は相当いますか。この時は編集の仕事しながら勉強できる時間があったのですか。

玉井 僕の方も若かったし、体の方も幸いにして病気がなかった。編集の仕事というのは、企画を立てて原稿を頼みに行くわけで勤務時間がわりに不規則ですから、昼間でも時間が空けば、どこかの喫茶店に入って本を読むとかはできます。僕は編集部員でしたから経済

関係の編集委員は外部の都留重人さんをはじめ東大の経済学部の有沢廣巳とか脇村義太郎とか大内力とかいう人たちです。これらの人たちが推薦した執筆者の家を訪問する。そのときいろいろ耳学問をする機会もありました。そこで一橋以外の人の幅広い面識の機会を得ました。

司会 学生時代から都留先生とは関係があったのですか。

玉井 都留さんは研究所長ですから学生新聞の原稿執筆以外では直接の接触はありませんでした。中山伊知郎さんが当時の経済安定本部(現在の経済企画庁)におられた都留氏を引き抜いてきたわけ。(経済研究所にずっと…?) 僕の学生時代はまだ大学院はできてなくて、ゼミも開講されていませんでした。僕の数年下の高須賀君なんかが入ってきてから大学院が出来てから都留さんも学生を教えるようになりました。あの頃は研究所はわりと良い仕事をしていました。大川一司氏や、また篠原三代平氏がまだ若い頃で、盛んに日本経済の実証研究をやっていました。ソ連の研究では野々村、岡稔、宮鍋など。

司会 そう考えると文献学的研究ではなく、まさに実証研究をめざしたわけでしょう。

玉井 経済学研究ではなく、経済研究です。日本は経済学だとも都留さんがいつも皮肉をいっていました。

2. 本格的な研究生活の開始

司会 先生はそうしますと、平凡社には4年

とちょっとおられたですね。

玉井 そうそう、その時たまたま明治時代に、男子の英語学校として創設され、戦後高校までだった大阪の桃山学院がその上に大学を創ったわけです。そこではじめは付属の産業貿易研究所員として採用されました。

杉本ゼミの先輩で大阪市大にいた末永隆甫さんの紹介で桃山学院大学に行きました。

司会 この桃山時代というのはどうでしたか。

玉井 昭和34年からですから丁度翌年が60年安保の時で、辞める頃が学生紛争後の昭和49年でした。

司会 初めての教職ですから相当張り切って行かれたと思いますが。

玉井 新設大学ですからまだ、大学としての研究条件が整って無いわけです。先生は一応集めたが他の条件が整っていないので、こっちがいろいろとこうしてくれとか要求を出すわけです。給与体系でも当時は私学が悪かったから国立大学並みに近づけようと組合を作って、理事長に交渉しました。(先生も組合やってたんですか?…) 書記長を2年間、委員長を2年間やりました(笑)。あそこは日本聖公会系のミッション・スクールで、立教と同じです。キリスト教では一番カトリックに近い英国教会で八代さんという日本聖公会の会長が理事長で学長もクリスチャンで、チャブレンという役職者が日本聖公会から派遣されていて、キリスト教関係の講義をするのですが、それほど宗教的な面の影響はなかった学校です。それだけにキリスト教関係からは財政援助はない。カトリック系でも上智など国際的

に資金が入ってくるようだが、それとは違って財政的には普通の私学と同じで、当時はまだ国からの私学助成金はなかった時代です。そういう意味では待遇はあまり良くなかった。

司会 スタッフの方は何人位おられたのですか。

玉井 経済学部だけですから一般教養の先生も含めて30人位です。

司会 最初は小さかったんですね。

玉井 神戸大学を定年になった先生や、京大関係者などあとと寄せ集めです。途中で内部のいざこざなどもあり、4、5年はそういうことでなかなか落ち着かなかったです。

司会 僕が大学に入ったのが1963年で、その頃から先生は原稿を多く書かれ出したのですね。昭和38年頃からですね。

玉井 そうですね、平凡社時代から翻訳や海外の現代資本主義論争の紹介などをやってきました。(ケインズ批判の古いものなど…僕の所にありますけど…) 留学は?) 1965、66年です。これは桃山で初めて留学制度を作り、僕が2人目です。本当は順番からいくと、5、6番目だけれども僕の順番の前の人が断ったので、急に僕に来て、費用は半分学校から出して半分は私立大学連合の組織の中で留学費を出して両方集めても150万円位で、今から考えると1ドル360円時代で、しかも1年間分だけだから、相当苦しかった。(これは30代後半でしょう?) 37、38歳です。向こうへ行ったらもう10年若ければもっと成果があるのと思いました。(この時にマントーの本を手に入れ

たのですか。) そうです。

司会 桃山に15年おられて、神奈川大学を移る時は何かきっかけがあったのですか。

玉井 僕は大阪に行く時から東京に帰りたかと思っていて、留学などがあって延びて、それから全国的な学園紛争が起り、それまでに話のあった東京周辺の大学も人事の面で、それどころではなく、紛争が一段落してから神奈川大学に移りました。神奈川大学もいろいろ紛争がありまして、横浜ですから地域的にも学生運動が激しく、それで辞めた人も神奈川大学の教員におり、その補充のため私に口がかかったわけです。その後教官人事紛争の余波があり採用人事を対立する一方の側から出しても教授会で潰されるわけです。僕の場合はたまたまうまく両方の側から支持されて満票だったわけです。

司会 金沢に呼ぶ時、いろいろ苦労しました。伊東さんに頼んで名前が出てきて、本当に玉井さん来るのかと言いながら、来てくれたらいいなと、恐る恐る依頼したわけです。

玉井 僕は経済原論とか経済学史のような講義を桃山と神奈川それに大阪市大や阪大で非常勤講師として講義していたわけですが、金沢大の担当科目は経済政策でしょう。政策は文部省の設置審を通るはずがないと安心していただけです。(政策の原理ということにして理屈が入るのだというふうにしたんです。それが売りだったんです。)ところが設置審からOKのサインが出て金沢大の経済学部創設のために、急いで僕の印が必要だということで、神奈川大の理事長には名前だけで金沢に行く

つもりはないからとにかく印を押してくれと神奈川大の有力教授に言ってあったから、先方もそのつもりでいたらしくいざ神奈川を辞める時はたいへん苦労しました。

司会 その時点では先生がもともと石川県に關係のある人だとは思いませんでした。関東の人は裏日本という発想で金沢に来るのを嫌がるんですが。

玉井 金沢なんかは何で行くんだ、何もいいことないぞと皆引き止めるわけです。

司会 結果的にはここで11年という大変長い間になりました。やっここで金沢までの事が分かりました。

次にお仕事のことですが昭和40年以降に先生が桃山にやって来て、その頃が僕が大学に入って経済学の勉強を始めた時期で、先生の論文をかなり早い段階で読むことになります。玉井 昭和30年代は翻訳も含めて、当時国際的にも盛んだった「現代資本主義論」の簡単なコメントというのが多いですね。

司会 その分野のものは理屈の方の問題と現実の問題の両方を結びつけて議論しているので、僕も読む機会が多かったです。これは平凡社の仕事をされながらまとめていかれたのですか。

玉井 そうです。「現代資本主義論」が目された理由はご存知のように、一つはケインズ主義による国家の経済的役割の増大や、第二はストレイチーをはじめ社会民主主義的な見解がヨーロッパに新しく台頭してきた。また「資本と経営」の分離を扱った「経営者革命論」、これはアメリカのバーリーおよびミン

ズなどが中心です。第三にマルクス主義の側からは景気循環の新しい発現形態論や「国家独占資本主義」が出てきました。

司会 先生の業績の特徴は当然、いかにも一橋あるいは杉本ゼミ出身というか、理論的には近経、マル経の両方にわたるといふ言い方でもできますし、学問的な流れは別として、現実のアメリカとかイギリスで展開されている経済と経済政策に踏み込んで書くということだったと思うのですけれども。マル経の人ですと当時のソ連の文献に書いてあるものがないか、どうかという議論の仕方をするのですが、先生の場合は現実の経済を踏まえているように思えますが。

玉井 一橋的と言うより経済学に対する考え方が日本の普通のマル経の人たちとちょっと違って、演繹的な理論をもって現実を解釈するというのではないわけです。だから、理論と政策と現実の政治行動とがたえず往環しながら理論なり政策論が形成されるという考え方です。そういう意味では普遍的な一般論は純粋経済学で、それは一つの理論体系かもしれないけれども、それは本当のポリティカルエコノミーというかそもそも経済学ではないというのが私の考え方です。

司会 先生としてはポリティカルエコノミーなしポリティカルエコノミクスで行くべきだという考え方があったのですね。

玉井 理論も一つの仮説的なものであり絶対普遍でない。だから古い仮説を現実の事象の変化に照らして変えるのは当然だと思います。歴史的構造変化の中で、しかも経済現象の変

化だけでなく、経済に関するルールや制度、そして国際政治や政治のシステムの変化のなかで、いかに現実そのもののルールを作り変えて行くか、当面盲腸が痛んでいて切除しないと腹膜炎を起すかもしれないときに、人体構造の研究をしていたのでは命が危ない。それと同じように緊急事態のためには、平素からきちんと経済システムなり、制度の歴史的特徴を理解している必要があります。その意味で経済は純粋科学ではないし科学とは言えないかもしれない。

司会 先生の場合はケインズの学問に対する姿勢が一つのお手本ですか。

3. ケインズの包括的研究、ケンブリッジ留学

玉井 共鳴はしてますね。ケインズはイギリス人で政治の内部に通じ過ぎていてシュンペーターとか他のドイツの学者とは環境が違うわけです。彼の真似は出来ないけれど、彼の経済学に対する考え方には共鳴はしてます。

司会 ケインズ左派の立場に近いものを持っていますね。

玉井 たまたまそうした仕事が過去に多くあるだけです。左派といえるかどうか知らないけれど、自分では特定のイデオログや「主義者」であることを意識的に避けています。その意味で最近のケインジアンの一部に対しては私はあまり評価していません。

司会 40年代に入りますと今の話ですが、「現代資本主義論」はもちろん続いて研究しているのですが、留学を境にして「ポスト・ケイ

ンジアン」、イギリスのケンブリッジ学派やカ
レツキの理論研究に取り組むといいますが、
吸収してくる時期になってきます。マントー
と会おうのも同じ頃ですか。

玉井 マントーの本はたまたまイギリスの古
本屋さんで見つけたのです。マントーの名前
はすでに私の処女作『ケインズ批判』出版の
頃からフランスの雑誌を見て、『一般理論』の
フランス学界への紹介者として知っていたが、
日本ではまったく紹介されていない。ちょう
どケインズの『平和の経済的帰結』(1919)が
一躍世界的に有名になって、ベルサイユ条約
についてのケインズの見解に対して、フラン
スの立場から見るとイギリスとちがって、歴
史的にもドイツに対する個有の対抗意識があ
るし、1930年代末に appeasement というか対
独宥和主義の問題がヒットラーに対して起こ
って、そういう非常に深刻な問題が当時のヨー
ロッパにあったわけでしょう。フランスの立
場からみるとケインズのベルサイユ条約観と
いうのは全面否定はしてないけれど、必ずし
も納得いかない点があるということでマントー
は第二次大戦中アメリカのプリンストンでこ
の本を書いたわけです。

司会 マントーそのものを扱うのはずっと後
になりますが、时期的には先生がケンブリッ
ジポストケインジアンの研究をやっていく時
期とマントーと会うのは同じ時期ですか。

玉井 桃山時代と神奈川大の前半は、主にポ
スト・ケインジア関係の論文を書いていまし
たので、それが一区切りついたあとに、時期
を遅れてマントーを紹介するというふうにく

果的になったわけです。

司会 おもしろいと思ったのはそういう意
味では、先生をポストケインジアン系列の
中に入れる人がいるかもしれませんが、そこ
にのめり込んでないわけです。そしてケイン
ジアンに対してややシニカルな目を持ったマ
ントーを一方でフォローしていく。

玉井 むしろ戦間期の歴史に興味がありまし
た。それと小学校時代に1938年のミュンヘン
会議をやった宥和主義者チェンバレンのニュー
ス映画がつよく印象に残っており、それと、
第一次大戦以後の戦間期の僕の少年時代のヨー
ロッパの歴史的関心からも、ケインズが世に
出てから1946年の彼の死去までの時代、つま
り「ケインズとその時代」の研究を本格的に
まとめてみたいとかねがね考えていたので、
マウトウ論は、いわば、初期ケインズの政治
思想の研究という観点に結びつきます。ケイ
ンズを研究する場合、もちろん経済学者、エ
コノミストとしてのケインズ以外に、著述家、
文筆家ケインズ、ステイツマンとしてのケイ
ンズの側面を欠くことはできません。『一般理
論』の草稿を何月何日に書きはじめたかとい
った解釈や文献学は他に一所懸命やる人がい
るけれども、現実の経済政策決定に彼が果た
した役割、つまり政治家ケインズについては日
本では研究されていない。また彼は、レトリ
ックの大家というか、文章家です。ケインズ
の生涯を辿っていくと非常におもしろい。まず、
彼はインド省へ勤めて、次はイギリス大蔵省
からベルサイユ条約の外交団に参加します。
その後は金本位制復帰反対で1925年に当時の

大蔵大臣だったチャーチルの金融政策を批判します。それから自由党のロイド・ジョージなどと共に公共事業政策を主張して大蔵省と論戦する。大蔵省の方はそれに対抗して大蔵省見解というのを29年に出す。たまたまその時に世界恐慌が起り、それでマクミラン委員会ですれにどう対処するか彼も加って議論する。1931年7月には金本位制を離脱します。そこでケインズがマクミラン委員会の中で非常に発言力を強める。彼は一方で『貨幣論』を1930年に出す。これはケインズの唯一の厚い本ですけれど、この段階ではまだ『一般理論』の有効需要論までは達していないが「貯蓄と投資」の解釈は新古典派のマーシャル的なものから大分違うわけです。あの本は上下2巻に別れていて、上巻は「理論」編で下巻が「応用経済学」、その下巻で金本位制の問題とか具体的な貨幣制度問題を扱っています。公共事業政策は短期的政策としてマクミラン委員会の最終報告では採用されなかったけれども、補論でケインズ案が触れられている。デフレ政策に反対でチープマネーで低金利政策をやるというケインズの意見は当時の政策当局に相当大きく影響したわけです。やがてそれが30年代に入って戦時体制に入っていくという経過で、最後は大蔵省もケインズの意見を受け入れざるを得なくなる。実際問題として経済政策がそういうふうに転換していくわけです。ケインズの場合初期の『平和の経済的帰結』以来、彼は大英帝国の存在をたえず意識しつづけ何とか大英帝国を救おうと、それに合わせて世界の経済的秩序なり通貨制

度を何とか安定化しようとしていて、その意味で終生イギリス人から離れられなかった。シュンペーターなどは母国チェコやハンガリー、オーストリアなどの政治的混乱の影響を直接体験していますから、政策論に対しても特定国家の問題から非常に距離をおいてナショナルな視点を無視する一般論になりがちです。ハイエクもナチズムを逃れてイギリスやアメリカに亡命します。(たくさんのユダヤ人経済学者も国家、ナショナリズムを軽視していますね。)ケインズは大英帝国の衰退を少しでも食い止めながら変化しつつある国際経済秩序に適した新しいルールを築き上げようという意識を持った一種の「愛国者」の面があります。それと新古典派のミクロ生産理論の分析用具を使ってそれらの現実不適確性を批判したうえで、新しいマクロ理論とのマクロ政策の浸透に果たした30年代半ばのケインズ政策決定に果たした役割、さらに『一般理論』の後の現実政策がまたおもしろい。

第二次大戦終了直後から今度は例のIMFと世界銀行の創立にケインズは盡力することになります。これもいろいろ難しい問題があり、特にIMF 8条問題の解釈をめぐる、英米専門家間で意見の対立が起ります。国際清算同盟案というケインズ案は、アメリカのホワイト案に妥協することになります。この辺の事については本学の論集でも詳しく述べましたが、国際通貨問題を中心にまだまだ調べるべきことがたくさんあります。政策形成に果たした政治家ケインズについては理論との関係でライフワークとして近くその一部を本に

して出版する予定です。日本人は誰もやっていない分野です。最近ではむしろイギリスのエコノミック・ジャーナルではなくイギリスのエコノミック・ヒストリー・レビュー誌を中心に近代史家が研究しています。最近ではレヴィジョニスト（＝アメリカの対日レヴィジョニストとは関係ありません）、つまりケインズ見直し論者がいます。ご存知のようにケインズ政策は1970年代にはマリタリストや合理的期待形成論や公共選択論などから攻められた受難の時代です。80年代に入って再びケインズが見直され復活してマリタリストが落目になっているわけです。そういう時代の中でレヴィジョニストはケインズの前のピグーや新古典派を再評価するとか、大蔵省見解というものをもう一度見直す。なぜケインズ的な有効需要政策や、公共事業政策が直ぐに採用されなかったのかと。それには行政的あるいは政治的な官僚機構の抵抗があった。政府公文書の50年未公開、途中から30年未公開であった資料が公に閲覧できるようになり、経済史家による研究成果がここ20年位どんどん出ています。極端に言うとかケインズ革命は存在しなかったという意見もその中にはあるわけです。僕の立場はもちろんそうではないですが。しかし1930年代後半ころから大蔵省の官僚もケインズの政策論を受け入れ『一般理論』をやっと真剣になって読み出したわけです。現実と政策そのものが理論より一歩先に進んで現われているからそうしなければ政策担当者としてやっていけません。

司会 先生、桃山から留学するとき、イギリ

スに渡る時は相当の思いがありましたか。

玉井 たまたまモーリス・ドップの翻訳をやってみて、彼に直接手紙を出しまして了承をとりケンブリッジ大経済学部のヴィジターとして留学しました。1965、66年はある意味では今からふり返ると理論経済学の黄金時代で、ケンブリッジにはジョン・ロビンソン、カールドア、カーン、スラッファ、ミードらが活躍しており、アメリカからもサムエルソンとかソロー、ガルブレイスらが訪れました。例の「ケンブリッジ資本論争」がありまして、イギリスのケンブリッジとアメリカのマサチューセッツのケンブリッジとのあいだ資本論争の最中です。最後はやや議論が細くなりすぎましたが結局、イギリス・ケンブリッジ側の勝利で決着がつき、サムエルソンは自著『経済学』の中の「新古典派総合」という言葉を自ら削除することになります。一方、労働党の政策がずっと浸透していた時代で、ポンドがどんどん減価して、ストップ・ゴウ政策をどうするか、重荷を投げ出して経済的に身軽にしてきたけれども、なかなかうまくいかない。他方ではEC加盟問題があり、労働党は加盟反対の立場です。また一方ではベトナムへ米軍の北爆があつて、ケンブリッジからもロンドンのアメリカ大使館にバスを貸切りデモに行くという光景に接しました。僕がいた初めの半年ぐらはい神戸大の置塩信雄氏が来ており、彼と一緒にバスに便乗してアメリカ大使館へデモを見に行きました。日本からは、置塩さんの帰国したあと、慶応の福岡正夫氏、和歌山大の小野朝男氏がケンブリッジに来ら

れ、6月になって暖い日には、3人でテムズ川でパンツ（細長いボート）を漕いで楽しんだこともあります。特に福岡さんとは同じ下宿に住んでましたので夜は僕の部屋で同行した僕の家内がレコード・ライブラリで借りてきたモーツァルトを聴いたり、ウィンザーやシェークスピアの生地、ストラスフォード・オン・エンボンまでブリテイシュ・カウンシルの留学生ツアーに加わって、本場のハムレットを観劇したりしました。置塩さんとも1965年のクリスマス休暇にスコットランドのツアーに行きました。また、私が去ったあとに、アメリカから東大の宇沢弘文氏がジョーン・ロビンソンのところに来たようです。

司会 仕事の上でもイギリスの政治経済あるいはケンブリッジの理論の研究がその時期は多くなりますね。

玉井 1年半という短い期間でしたが、学問的につよい刺激をうけ、貴重な体験をすることができました。

司会 行き詰まる保守党の政策としてはどうしようもない時期に来ているのも確かでしたが、その頃のケンブリッジのニューレフトもあるいはニューではないレフトもいたと思いますが、それとポストケインジアンとの関係は。

玉井 イギリスでは、もともとヨーロッパ大陸の諸国とくにフランスやイタリアのように、オールド・レフトの伝統は弱く、ドップがアカデミズム内で戦前から唯一のマルクシストでした。そうした中で50年代後半からニュー・レフトの活躍が目立つようになり、雑誌『ニュー・レフト・レヴュー』がペリーアンダーソンら

により発行され、又、ケンブリッジの歴史学部の助教授レイモンド・ウィリアムズが『ロング・レボリューション』という本を書き、ペンギン文庫にも入って多くの読者を引きつけていました。それには歴史的背景があるわけです。1920年から1930年代始めに、ヨーロッパの知識人がソ連を訪問し、例えばウエツプ夫妻や、アンドレ・ジッドやロマン・ロランは社会主義の未来に夢を託しましたが、他方ではそれに幻滅を感じた者も多くいました。ヴァレーもケインズも、後のジッドもそうです。産業連関分析のレオンチエフもアメリカに亡命しました。私の恩師杉本先生も彼らドイツで直接そのことを聞いて知っていました。ポストケインジアンはその後有名になった若手が、当時まだ大学院の学生で主にジョン・ロビンソンとかパシネッティ（イタリアから客員講師で来学）それからスラッファーがいました。スラッファーは経済学部のマーシャル図書館長をやっていて、彼は1950年に出版した『商品のための商品の生産』以後ほとんど論文を書かないでもっぱらドップと共にリカード全集の編集にたずさわっていました。彼はイタリア人ですから、経済の大学院生では、イギリス人よりは彼をたよって留学してきたイタリア人の方が多いほどです。それとインドやパキスタンからの留学生の方が一所懸命勉強して、その中からその後、ポストケインジアンとして活躍した人が多く出てきました。

司会 ネオリカーディアンのようにスラッファーよりになる人と、本来のジョン・ロビンソン

系列の人とみんな一緒にいたわけですか。

玉井 まだその頃は完全に分化されていなかったです。

司会 その場合マルクス主義的な人達もみんな一緒に、ワイワイやっているとこの感じですか。

玉井 イギリスの場合マルクスの如く、
『資本論』を読んでマルクス経済学の「価値論」をもとに議論をするというのではなく、一つの思想として、学説史的興味としてです。たまたまジョン・ロビンソンがマルクスの経済分析について近経の用具を使って論文を書きましたがせいぜいその程度です。経済学者の関心は。モーリス・ドップだけがケンブリッジでは日本的なマルクス経済学者かも知れない。しかし彼にしてもマーシャリアン的な学風をそなえており日本のマル経とは大分違いますね。彼の処女作『賃金論』(1927)の序文をケインズが書いています。カレツキーの利潤論もマルクスの影響はあるがマルクスの解釈じゃない。特にイギリスはそうです。
司会 僕はこの時期に先生が書かれたイギリスの労働党政権に関する論文がおもしろいなと思った記憶があります。最後のところが「労働党の性格と左翼知識人」、こういうところで結んである。この時代先生がどこに関心をもっておられたのか、よく分かります。

ケンブリッジの理論研究と平行して副産物として結果的には出てきますが、学説研究の分野もありますでしょう。ケインズはもちろんですが、シュンペーターも最近ではマネタリズムやサプライサイダーに関するものが…。

玉井 「現代資本主義論」を30年代に紹介し、その次がケインジアンも含めて「経済学史」「近経方法論の再検討」それに社会的共通資本、インフラストラクチャーと経済発展についての論文などがあります。これは新制度学派の新しい研究方向であり、私の方が宇沢弘文氏より少くとも10数年も先行しています。昭和40年代、50年代のものが多いです。

司会 1970年代になりますと、経済政策上の大きな問題についても発言がありすね。

玉井 たまたま頼まれたりして、『エコノミスト』の昭和45年の経済白書批判。

司会 先生の書いたものが従来は学者の間の議論だったのが、この頃から外に向かって出てくるようになり、現在もずっとこの仕事は続いています。これはたまたま頼まれたからと言うことでしょけど、ある程度考えるところがあってですか。

玉井 とくにそういう考えがあつてのことではありませんが、日本経済の現実の問題も調べなければいけない、発言する機会があれば発言しようというくらいのことです。財政や税制問題についての論説は小学校の友達が大蔵省を退官後、同省の外部団体でシャープ勧告により設立された日本租税研究協会・専務理事をやっていて頼まれたのです。大蔵の現役及びOBや経団連の人々と研究会を通じて接する機会がありまして、そういう人達が何を考えているのか、日本をどういう方向に持っていこうとしているのか、そういう関心も税制の勉強以外にありました。

司会 40年代にはちょうど国債発行の問題が

でてきたりしたので、経団連もケインズ主義を本格的に政策として考えだしたのでしょうか。

玉井 80年代に入るとアメリカでは新保守主義がでできます。日本の財界の主流派もこの時期マネタリスト的な小さな政府論です。新保守主義の傾向が強かったです。そこで私が司会をして、政治学者では東大の佐々木毅、佐藤誠三郎、経済学者では京大の佐和隆光氏を講師に呼び、財界の幹部と各国の新保守主義について勉強会を開きました。

司会 80年代に入りますと、今出てきました新保守主義的な理論や思想に対する批判的な考察と、それから先生がライフワークにされるといふ、ケインズの経済思想、社会思想と理論そういったもの、ケインズの包括的研究が発表され、いよいよマントウが出て来て、僕らも彼の所説が理解できるようになったわけですけども…。

玉井 エティヌヌ・マントウはロンドン大学教授で『イギリス産業革命史』の著者として有名なポール・マントウの息子です。父親のポールはフランス語と英語を同程度に理解出来る人で、ベルサイユ条約の時の官選通訳の最高責任者でした。その点も今度のケインズの一連の全集やイギリス外務省の当時の公文書を見てみると分かってくる。特にイギリスの場合は、ケインズも積極的に政治外交問題にかかわる機会が何度かあり、具体的な重要な政治決定問題に政府が学者の専門を生かし、学者もそれに応じる。それが終わるとまた大学に帰って行く。

司会 自分の父親がそういう事をやる、マルトウはそういう場面に身近にいて、その雰囲気を感じているわけですね。前から不思議だったのは確かにケインズは有能だったかも知れないけど、官僚制度のもとでケインズがどうしてああいうふうな、政府の政策決定に関与出来たのか、疑念があったのですが、そういう経緯だとしますとケインズも政府人脈の近いところにいたわけですね。

玉井 日本のような官僚の意向がそのまま通り、権威づけのために学者が審議会や調査会議会の委員になるのとは違って、向こうは直接行政府に学者が入って行って、経済学者だけの委員会で構想した原案を政策として具体化するために学者自身も非常に努力するわけです。それにまたケインズにしてもビグーにしても自分たちよりも若い有能な経済学者をそういうところに引っ張りこむわけです。特に大不況期とか戦時体制になるとよけいそうなります。例えば、ロビンズ、ミード、オースティン・ロビンソン、ロバートソン等がそうです。それにケインズは官僚のトップとか政治家と個人的にも非常に近いわけです。同じケンブリッジ卒業のニーメイヤーは上級公務員試験でトップの成績でケインズが2番。トップは大蔵省へ入って、彼が大蔵大臣になり、そのあとイングランド銀行総裁になる。2番で合格のケインズはインド省に入ります。ですから子供の頃からの親しい間柄ですね。今はそうした個人的つながりは崩れつつあるけれども。そういう社会構造です。知的支配階級があったわけです。労働党と官僚それに

学者もきちんと結びついている。それがしだいに第一次大戦後イギリスだけでなくフランスでもドイツでも崩れていき大衆社会になってきている。そこで大衆的な民主主義の政治決定・政策決定がでてくる。向こうではコーポラティズムと言いますが、圧力集団、利益集団の力が非常に強くなって政策決定する。だからケインズの政策論もダイレクトに通らないような、そういうものを考慮しないといけない政治過程がでてくる。それを盛んに強調するのがアメリカの新制度学派や公共選択学派であり、彼らが70年代に出てきて、ある意味で反ケインズの議論に力を入れてきているわけです。

司会 かなりストレートに利益集団の政策がでてきます。日本型のコーポラティズムといえますか、労働組合とか一般の人の力は弱い。企業集団利益と官僚のつながりを考えると、むしろ日本の方がケインズの・旧大英帝國的システムとおなじような機能を持っている、ブキャナンのシステムとは違うのではないかなと思います。

玉井 日本の場合はアメリカと大変違います。日本の官僚制というのは戦前から切れてないもの。特に戦前は内務省で今は大蔵省だけど、イギリスに近いものが感じられます。さっきのブキャナンの公共選択論は直接日本には受け入れられていない。経済学一般にそうですけれど、アメリカの場合は、市場メカニズムが基礎にあって、その利潤分配は株主優先で経営者は株式市場の動きに支配される。そういう競争市場の経済関係の捉え方、それ

が新古典派経済学の対象ですが、日本型、ドイツ型はロンドン大学のドーアがよく言っています、共同体型企業システムです。

司会 サッチャー政権が成立して、ケインジアンがうとんじられたというよりケインジアンが転向してしまいますでしょう。僕から見るとケインジアンがそんな反・非ケインズの的なことを言ったらまずいんじゃないか、ということが起こってくる。アメリカはもっとひどいですが、日本でも同じような現象が起こってくる。それを見ていてどういうふうな印象も持たれたでしょうか。

玉井 ケインジアンにもいろいろありますが、ケインジアンの中にはケインズ自身の政策論とはまったく以て非なるものがあります。サッチャーイズムそのものは社会制度とか政治改革の要素が強くて、結局サッチャー政策の経済的帰結というのは全然プラスは無いわけです。インフレがはげしいし、失業は多い。そういう意味ではマネタリスト的なイデオロギーは全然成功していない。だけでも経済学者が転向するというのは、僕にはよく分からない。しかし新保守主義台頭の背景には、マネタリズムというよりも、むしろハイエク的な経済倫理感から、社会保障の乱用や、大衆のモラルの荒廃を背景にして、勤労意欲や伝統的な良俗を見直すという気分が、経済的パフォーマンスの失敗の中で欧米でとくに高まっていたことも否定できませんね。

司会 日本の学者が転向するというのは分かりますけど。

玉井 それは制度としてのイギリスのアカデ

ミズムに何か原因があるのではないかと思います。

司会 先生はソフトな批判というか、遠回しな批判をされている。これはどういうことでしょうか。本当は強く批判したいのだけでも忍びないというのがあって手加減してるのかもしれない。私自身は日本のケインジアンにもっとマネタリズムの批判をやって欲しいと思っています。学問上の被害としてはマネタリズムの害悪は非常に大きいし、政策実践の上でも、立場を超えて被害が大きかったと思っているんです。

玉井 別に意識して手加減をしているわけはありません。

司会 最後に80年代に入ってから先生の仕事の中に出てきたマントウのお話を伺います。

玉井 僕の関心が2つありまして、一つはベルサイユ条約そのものが世界経済、特にヨーロッパ経済の中でどういうモメントになって、その後の現実の経済の流れに影響したかというたとえば賠償問題。もう一つは政治的な問題で宥和主義の問題、これは国際関係の問題だけど、僕の子供の頃、映画しか娯楽がなく、しかも小学校の頃は映画館に勝手に行けないわけで、見つかるかと退学ですが、クラス全員で先生に引率されて見たニュース映画で、中国大陸の戦争のニュース映画が主流だけど、同時にチェコのズデーデン地方分割問題にチェンバレン首相がミュンヘンまで行って、ヒトラーと会い帰国した、ロンドンの空港で平和が保たれたと行って大歓迎を受けている場面の印象がもの凄く強かったわけです。その

意味というのは当時まだよくわからなかったけど、アピーズメントつまりチェンバレンによるヒトラーに対する宥和主義です。それが大戦勃発後のフランス人から見ると非常に我慢できないし、フランスの当時のエリートの世界観、ヒトラー観というのがあって、それとケインズの見解とはどう異なるのかという関心です。ケインズ自身はさっき言ったように、もともと愛国者でありリベラリストですから、その時点での自分なりの最高の努力をしたけれども、彼自身は別にヒトラーを支持してるわけではなく、もちろんファシズム大反対です。ところがケインズの国際政治観をみってみると、すでに1920年代前半にソ連を旅行して、『ソヴェト短見』という彼のエッセーをみても判るように、真の敵はボルシェヴィズムによる西欧支配なんです。ヒトラーも困るだけけれども、大戦にさえならなければ、まあヒトラーの方がましだと、そういう危機感がケインズにある。やはりそういう国際政治への関心が子供のころから非常につよくあり、マントウもケインズも当時の国際的パワーゲームの渦中にいたわけです。

司会 チェンバレンが帰国して大歓迎されますでしょう。大歓迎した時代の英国人の心理というのは当然ケインズにもあった思うのです。とことん考えたかどうかは別として。だからその影響もおそらく宥和主義というつもりもなくこれで戦争避けられたらいいと、やるんだったら東の方でやってくれと、そういうふうな大衆的な感情も社会的には相当強くあったと思う。しかし、戦場になっていく

フランスからしたら、後でそれをどう見るかといったら相当厳しい。あれだけの賠償が途中で少しずつ緩和されて、ドイツは再軍備もでき工業力も強化し、一時景気も良かったわけでしょう。

玉井 フランスは負けてパリは占領され、マントウ個人は奨学金が出てアメリカへ行ってプリンストンの高等研究所で研究して、あの本を書き、書き終わってからフランスに帰って来てました。しかし占領されてましたから彼はピッシー政権には行かず、ドゴール派のルクレール將軍揮下の空軍に志願してパリ解放の一週間前に航空機事故で死に、あの本は彼が死んだあと父親のボールの力で出版された。ケインズもそれは見ていない。ケインズはこの本の出版直前に死んでますから。運命の境目を感じさせる大変な文献です。彼は若い頃フランスの経済学の雑誌に、ケインズの「一般理論」を初めて紹介しています。この論文は僕の処女出版『ケインズ経済学批判』(1957)の参考文献目録にあるように、前から注目していました。フランスは当時からあまり経済学のアカデミズムが強くないけれども、カレツキの有名な利潤決定論を1935年に掲載したこともある『レビューデコノミー・ポリティーク』という学会誌で初めてフランス人に「一般理論」を紹介し、乗数理論の評価だけではなく利子論の中の流動性選好論を、ウィクセルやオーストリア学派の利子説と比較し、「一般理論」を高く評価していました。英語の翻訳もありますが僕はその紹介も神奈川大学の雑誌にしています。マントウ自身はロンドン大

学では父親の影響からラスキやハイエク、ロビンズそれに労働党のフェビアニズムに近い人と付き合いがありました。

司会 それでは思想的にはマントウ自身も左翼とつながりがあるのですね。

先生の論文を通じてマントウを知り、僕自身が読んでこれ面白いと思いました。

玉井 マントウの業績は制度化された経済学会から注目されなければ僕は個人としては非常に面白いと思っていますし、学会の流行に関係なしに、国際政治史の面から見ても、経済思想の面から見ても、政策論の面から見ても非常に面白い。

司会 面白いと思いますね。僕自身、先生が書いているのを参考にしながら、現在の国際通貨問題、国際通貨制度を考えています。ケインズ自身がどういうふうな理論的な基準と政策的な発想を持っていたか、それがどういうプロセスでホワイトなどのやりとりの中で、あるいはイギリスの内部あるいはアメリカ内部の中でも意見の対立がある状況の中で出来上がっていったのか。実際これから同じような議論をしていかなければならない。

玉井 今、ニクソンショック以来、ブレトンウッズ体制が崩壊して金とドルの公の結びつきはなくなったわけで、今は過渡期です。今こそ国際通貨は難しいけれどきっちりやらなければなりません（ところが企業の人はやらないです）。それを切ってからIMFの体制がどうして出来たのか、きちっとした方向、展望があったのか、そこをあまりやってないわけです。技術的には大蔵省とか金融トップ

とか東銀あたりでよく知っている人はいるけれど、それを誰かがやらなければならない。司会 金融論の人はこの辺の研究をやっていない。業の人達は通貨制度をいじくるのではなく、現在の通貨制度を前提として身の振り方を考えるというビヘイビアになってしまっている。それはしょうがないこととは言えますけど。どういうふうな通貨制度をこれから考えていくのか、私達も世界銀行の連中とやりとりするべきだと僕は思っています。その時に過去の交渉や議論の中身を見てきますと、こういう凄まじいしんどい議論をやらないと駄目だろうと思います。もう一回国際金融パニックでも起こらないとその機会はないのか知れませんが学者のレベルでその作業をやらなければならないだろうと。

玉井 ホワイトという人も非常に個性が変わった人でアメリカ政財界から疎外されるわけで、彼はなんで死んだのか解からないんです。スパイ小説を読むみただけで戦後数年もたないうちに死んでしまう。その事務局の仕事をしてた金融学者の本が最近出て、その回想録を見てみると、どちらかというとはマネタリスト的な立場の人だけれども、そういう人たちがIMFをつくる際のアメリカ側の主流であった。最近それでは成りゆかなくなってきたわけです。(詳しくは、私の連載論文のNo.1 Xで説明されています。)

司会 今のアメリカ自身は当時のホワイトの立場を完全に投げ捨てて、逆にミルクの配達をして欲しいという具合に変わってますから、どちらかと言うとむしろ政策要求的にはケイ

ンズ的な、しかし国際通貨の発行所は自分の所で握りたいという立場です。その点になるとマネタリズムもくそもない、国益むき出しという感じがするんです。当時のホワイトは国益と理論とある意味では健全な国際金貨本位制と国益をうまく結合していこうとした。ケインズの主張はアイデアとしては評価できるが時代の現状からいうと虫がよすぎる。

玉井 そこがケインズはステイツマンだからホワイト案に妥協していかざるを得ない。イギリス本国に帰るとイギリスとスターリング地域の立場が弱まると言われる。しかし政治的にはそうせざるを得ない。

司会 私自身はホワイトはアメリカの国益の権化だと最初思っていたんですけど、あの議論のやりとりを見てみると、かなり健全な通貨システムを執行しようとしている。今のアメリカの政策の代弁者と相当違っているという印象を受けました。

玉井 ホワイトは死ぬ前に向こうのトップから疎外されていた。どういう理由か分からないが、ファシズムに関係したとか、ソ連のスパイではないかと嫌疑を掛けられたようで“売国奴”だとひどい言葉を掛けられています。

司会 国益の問題よりも論理がたった人だったようにみえますね。

玉井 そこへいくとアメリカのエスタブリッシュメントの権力者論からみればちょっと邪魔になったんじゃないの。

司会 先生はこれからさらに福井県立大学に行きますので、もう少し教育の仕事が続くと

思いますが、研究については今のやりかけの仕事は簡単に終わらないでしょう。これからについてはどんなふうなことをお考えなんでしょうか。これまでの延長線上で今までやりだしたものをやるだろうと思いますが。

玉井 やりかけたものはありますから、いろいろと。

司会 先生のポスト・ケインジアンに関する論文が一冊の本にまとまってもおかしくないと思いますが。

玉井 ケインズ全集が30巻出て、『一般理論』とか『貨幣論』とか、そういうのはみな読んでいるけどもその中の何冊かのアクティビティという巻がたいへん面白いです。それらを今フォローしているけれど、なかなか時間が掛かります。さっきいったイギリス政府の公文書が公開されて、それに僕は直かに当てられませんから、その主要なものに向こうに行って、一度確かめないと著書として公刊出来ないと思っていますが、切りがありませんので今年中にはその一部のまず一冊分を出版する準備をいまずめています。この連載文を執筆中、一橋大や京大の若手研究者を始め、関心をもっていろいろコメントしてくれるものがあり、研究会に呼ばれて話をしたり、反響があって、励みになります。そういうことで時間は取られるけどポスト・ケインジアンについては今までに何本か論文がありますから、それはそれで一つにきちっとまとめて僕なりの視点を出したいと思います。

司会 アメリカ経済学ばかりワーと日本に来ているので、僕は日本のポスト・ケインジアン

に期待しています。新古典批判はやるんだけれど彼等にもう一步進んで出て欲しい。

玉井 たとえばケンブリッジ「資本論争」の結果、一先ずイギリス・ケンブリッジの勝利に帰しますが、その後のポスト・ケインジアンは、ミクロの企業行動とマクロの利潤・分配説との総合の試みとか、一連の「新しい古典派マクロ経済学」に対抗して、失業均衡の下での貨幣の特性について精密化する試み、つまり「生産の貨幣理論」という視点の研究の方向にいまあります。

司会 サミュエルソンの理論は中身はともかく、形式的にはかなりエレガントに体系化してあります。ポスト・ケインジアンというのは現実の問題がいつも背後にありますから逆にいうと、統一的な単純化された体系ですべて説明するのは避けるので、結果として分かりにくいでしょう。

玉井 翻訳されてすぐ理解するには便利ですから、日本ではどうしてもすっきりしたサミュエルソン型の方が定着しやすい。

司会 特に経済官僚にはその方がいい。知識人向けにポスト・ケインジアンものというのがもともと出てきたらいいのに感じます。マルクス経済学もポスト・ケインジアンに対する今の中堅と若手の人達の親近感はかなり強いと思います。

玉井 例えば、慶応の北原氏が大分以前に寡占論を出版したが、最近はどうなんですか。寡占論は30年代の終わりのスウィージーやオックスフォード経済調査からずっと来て、一方はペインなどの産業組織論、アメリカの新古

典派に近いものにつながるものと、もう一つのようで無いもの。たとえば、ポスト・ケインジアンのマリスやウッドのものがああります。司会 最近のマルクス経済学に共通するのは、ケンブリッジ的かもしれませんが、現実を理論的に解析する傾向だと思います。だから一般的な理論を確立するのではなくて、個別的にアプローチしていく傾向がかなり強いのです。先生や僕らが習ったマル経は流行らない。ただソ連の崩壊もありますので、一番最初のマルクスの価値論のところから含めてもう一度再構成し直す、という意味での見直派の研究、これをやっているのは若手の方が多いです。僕らの世代はそういうのはだめです。見直すといっても価値論でいえば現実の価格の問題から見直す。こういうアプローチに変わっているんです。若い人達は現実に対する感受性がわれわれとちょっと違っていて、思弁的にマルクスを見直す傾向がでています。若い方が保守的です。

玉井 だいたいそうですね。マルクス経済学の人もそうだし、近代経済学の若手もそうです。

司会 そういう傾向がありますね。大問題を頭に置いてない。

玉井 世間並みにやたらと視野が狭く、細くなる。「経済学の制度化」現象でしょうね。

司会 マル経の方では現実と理論をなんとか結合していこうという方向性がないと意味がない、という認識がだいたい主流になっている。そういった意味では変わったと思います。だからポスト・ケインジアンのアプローチと

か、アメリカの制度学派のアプローチに親近感を持っています。最近、宇沢さんやそのお弟子さん達の近代経済学者が資本主義を不均衡システムとして捉えていくというアプローチをしています。それはポスト・ケインジアンとマルクス経済学と同じです。だいたい時代の風は変わり僕みたいのが浮き上がらないで、やられていられる状態になってきました。いい方向に行ってくれるのではないかなと期待はしているのです。いい意味での政治の力が働く時はいいのですが悪く働くと、経済学者の主體的な研究というのが、たえず政治とか社会の関わりの中で問題になるものです。政治にとって都合の悪い勉強はやらなくてよろしいとか。あるいは政治的な判断を論証するような研究はいいとか。ロシアとか中国とかまさにそうだったのですが、日本でもその影響が50年代、60年代は強かったわけです。近経にもまた逆の意味でそうした政治性があったと思います。やっとなんか現実そのもので発言する傾向がスクールを超えて、あるいはスクールを超えた議論となってきたと思います。

玉井 そういう面ではよくなっている、一時よりは風通しもね。

司会 先生は風通しの悪い時代にあえてその辺をやりだしたでしょう。

玉井 ある意味ではたえず主流じゃなくて、一歩はずれた所で学会の流行とは別に僕個人の関心から、複眼的にやってきました。その点だれのエピソードでもありません。

司会 そういった意味では先生達のアプローチというのは現在期待されるのだと思います。

先生の今の仕事とポスト・ケインジアンについての仕事が出てきたら、今の学生達にもいいなと思います。学生の教科書にポスト・ケインジアン立場の教科書というのがないですから。

玉井 ないでしょうね。但しごく最近、伊東光晴著『ケインズ』（講談社学術文庫）の中で、信州大学の青木達彦君が学生向けにポスト・ケインズについて解説しています。

司会 日本の教科書はみんなアメリカの教科書ですから、そういった意味では残念です。最後ですが金沢に11年おられてのメッセージを、スタッフとか学生に対してお願いします。

玉井 僕は金沢はわりといい印象を持っています。社会生活や市民生活に浸透して、入っていく機会があまりなくて、表面的な事しか知りません。金大には、50歳代半ばに来ましたので僕自身人間として角がとれて、まるで息子や娘に接する気持ちでした。学生諸君に対しては、とにかく自由闊達に自分の思考を飛躍させるよう心がけてほしいと思います。

司会 お墓を見つけたのは偶然なんですか。

玉井 見つけたんじゃないくて、ずっと大乘寺にあったのは知っていたのですが、父が戦争中日本にいなかったり、戦後、生活が大変でほったらかして置いたのです。戦前までは金沢の親類ときちんと交流があって前田家の会合にも出ていたのです。戦後連絡が悪くて墓が荒廃していて、たまたま僕が金沢大学に来ることになって、お墓に行ったら連絡してください、そのうち処置しますと告示してあったのです。それは大変だということで僕が敷

地内の3カ所に分かれていた墓を整備したわけです。本多家の墓所のすぐ隣です。その点では金沢大学に感謝しています。先祖が金沢に来たのは前田利家が尾張から来たときですから僕で13代目です。市立図書館にも玉井家文書というのがちゃんとあります。その寺には位牌も全部ありますし過去帳もあります。駅前の玉井町、昭和町、今ちようど有料駐車場になっているあの辺に屋敷があった。明治のときに本多は地元に残ったけれども何人かは出てしまった。玉井家も私の祖父が旧制四高の前身の金沢師範を卒業後、明治10年頃、東京に出て来たわけです。だから父が生まれたのは東京、僕も生まれたのは東京です。しかし、祖父はすでに死去していたので僕の小学校、中学校の頃は金沢の話もあまり出なかった。（金沢人意識は全然なかった？）全然ないですね。だから、金沢大学に来たのは奇遇ですね。石高にしたら1万石以上は領主になるから、本多、奥村、長などは皆1万石以上でしょう加賀八家は。その下の家老職が13家位あって玉井家は5千石です。子供がいないと養子結婚するので玉井と不破や中川と皆姻戚関係になってしまうわけです。父は昔からそういうの避けていました。子供のころは不良少年で祖父の厳格なしつけに反発していたみたいです。だから子供にもあまり先祖のことは話さないわけです。父が死んでからいろいろ判ってきました。（先生にもそれは引き継がれたみたいですね…）（笑）

司会 2時間にわたっていろいろ伺いました。時間に制約がないともっといろいろ聞けたの

ですが。今まで聞いてないのを一気に伺おう します。本日はどうもありがとうございます
としたものですから、なかなか大変でした。 た。
これからも末永くお付き合いよろしくお願